

躑は僕は鐵板戸の閉つてゐる長者の家の前まで來た。

そして鐵の板戸を足で蹴つて起きないかとドナつた。

すると鐵の格子の窓をあけて、女中が何か御用ですかと言ふ。

名刺を渡して、面會に來たんだと言ふと、若い男が覗いてヒツコンだ。

「御主人はまだ起きて被居しやらない」と女中が云ふ。

暫らく家の前を行きつ戻りつして待つた。

「雑煮を食はしてくれ、年始に來たんだ」

僕は腹が減つて來たので、金の掛かつたうまい、雑煮でも食べれば、おとなしく歸るからと言つたのだ。

でも戸をあけない。

大人が二三人右往左往しだした。

扉の横脇の小さな門も閉つてゐる。

「寒いから早くしろ、あけないのか」